

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	助永 憲比古
論文担当者	主査 橋 俊哉
	副査 八木 秀司
	副査 松永 寿人
学位論文名	Neuropathic Characteristics In Patients With Persistent Idiopathic Facial Pain (持続性特発性顔面痛患者における神経障害性疼痛の特性について)
論文審査の結果の要旨	
<p>持続性特発性顔面痛(PIFP)は以前には非定型顔面痛と呼ばれていた疾患であり、その病態生理は解明されていない。神経系の障害が原因となる神経障害性疼痛や感情、ストレスが原因となる心理社会的疼痛など、様々な要因が複雑に絡み合い脳内の情報伝達ネットワークの機能異常が生じている状態ではないかと考えられている。そこで今回、先行研究において学位申請者らが日本語版を作成し、その妥当性を検証した神経障害性疼痛のスクリーニングツール Douleur Neuropathique 4 (以下 DN4)を用いてPIFPの神経障害性疼痛の関与の可能性につき多施設共同研究で検討した。兵庫医科大学病院, 福井大学医学部附属病院, 西宮市立中央病院 3 施設のペインクリニックを受診した患者から、性別、年齢、BMI、慢性疼痛の原因疾患、痛みの持続期間、疼痛強度(VAS)、内服薬、DN4データを取得した。PIFP 群 19 人と神経障害性疼痛である帯状疱疹後神経痛(PHN) 群 33 人で比較した。さらに、その中で年齢、性別が一致する各 16 人に対し傾向スコアマッチングを行った。DN4 スコアは PIFP 群で PHN 群と比較して優位に低かった。神経障害性疼痛の関与が示唆される DN4 スコア 4 点以上の患者は PIFP 群ではマッチング前 10.5%, マッチング後 12.5%であったが、PHN 群は マッチング前 66.7%とマッチング後 75.0%であり、DN4 スコア 4 点以上の患者は PIFP 群で PHN 群と比較して優位に低かった。すなわち PIFP 群ではわずかに約 10%の患者で神経障害性疼痛の関与の可能性が示唆された。本研究の成果は、PIFP における神経障害性疼痛関与の可能性が低いことを解明した有意義な知見であり、学位授与に値すると判断した。</p>	